

サラリーマンは300万円で小さな会社を買いなさい

人生100年時代の個人M&A入門

File.9 ベンチャーキャピタルは博打だ(2)

文 三戸 政和 text by Masakazu Mito

私が出たベンチャーキャピタルでも、投資成功実績は「15%ぐらいでよし」とされてきました。「投資成功」とは、投資した会社が5年ぐらいの間に株式上場するか、高く売却できることです。私の経験値としても、ベンチャーキャピタルが投資した企業が10社あるとしたら、およそ4社が鳴かず飛ばずのまま社長に株を買い戻してもらうか他者に売却して資金を回収することになり、およそ4社が倒産します。

それでも、上場する企業があれば投資額は数十倍にもなって回収できます。1社が上場すればトントン、2社が上場すれば大成功、という世界なのです。確率論だけでいえば、ほとんど博打のようなものです。つまり、1億円を投資しても8割から9割が成功できない。それが起業の現実です。

しかもその会社は、素人が無鉄砲に起業した会社ではありません。私たちがのように投資を専門にしている会社が目をつけ、展開される事業領域の市場動向や、それらを実行するチームメンバー、技術などを検証し、財務や法務なども、入念にデューデリジェンス(審査)を行い、社長と何度も面接を行い、隅々まで調べ上げたうえで出資を決定した「期待できる会社」です。それでもほとんどの会社が成功できません。それぐらい、ゼロからの起業を安定させるのは難しいのです。

もちろん、私たちが見逃してしまう会社も、私たちに投資を求めなかった会社もありますので、単純に言い切ることはできませんが、「千三つ」という言葉は、決して誇張でもなんでもなく、ベンチャーキャピタルの現場感覚に近いものだということは間違いなく断言できます。

私は、事業が大成功して有名人になり、メディアの寵児にまつりあげられるような社長を見てきた一方で、目を輝かせて私たちに事業計画を説明し、会社の未来と夢を語り意気揚々として自信に満ち溢れていたはずが、事業が計画通りに進まず、徐々に元気を失い、数年のうちにはビジネスの表舞台から去っていつてしまう社長も数多く見てきました。

ベンチャーキャピタリストという職業は、そうした人の諸行無常というものに日常的に接する職業なのです。一見したところ華やかな業界だと思われがちですが、マイナスの状態に陥った案件を手仕舞う作業は辛いものです。

ゼロイチ起業に挫折した社長たちの表情は忘れられません。それでも、私たちの投資がなければ、成功に至ることができなかった会社は多数あります。そうした新しい成功企業が世の中に羽ばたいていくことを励みに仕事を続けてきました。



「サラリーマンは300万円で小さな会社を買いなさい」人生100年時代の個人M&A入門 (講談社+α新書) 定価907円(税込)

Profile

日本最大級のベンチャーキャピタル(運用総額1,500億円)にて、国内外の投資先に経営参画しながら、成長戦略、株式公開支援、M&A戦略、企業再生戦略などを行う。その後、兵庫県議会議員として、行政改革に着手後、地元の加古川市長選挙出馬のため議員辞職し出馬するも、落選。ロンドンにて神戸ビーフのプロモーション会社 Tajimaya UK の立上げを行い、従業員へ事業引き継ぎ。中小企業むけの事業承継・事業再生専門の投資ファンドである日本創生投資を創業。

